

聖書：創世記 32：3～32

説教題：太陽は彼の上に

日時：2024年3月17日（朝拝）

ラバンの下での20年にわたる奴隷のような苦しい生活から解放されて、ヤコブはついに自分の故郷へと帰って来ます。しかし一難去ってまた一難。彼はより大きな課題に直面しなければならなくなります。それは兄エサウとの和解という課題です。ヤコブがこの地を離れたのは彼が兄の祝福を横取りして命を狙われる身となったからでした。母リベカは27章45節で「兄さんの怒りが収まって、あなたが兄さんにしたことを兄さんが忘れたとき、私は人を送って、あなたをそこから呼び戻しましょう」と言いましたが、その知らせは20年経っても彼のもとに届きませんでした。ということは兄エサウはまだ怒っているということなのではないでしょうか。このまま故郷に帰ることは自分の身を危険にさらすだけではないでしょうか。神の救いの約束を担う者としてヤコブはカナン之地に戻って生活しなければなりません。そんな彼にとって兄エサウとの和解は避けて通ることができない課題でした。

さてヤコブは前もってセイルの地、エドムの野にいる兄のエサウに使いを送ります。今、ラバンの下から帰って来たこと、今や財産を持つ者となったこと、これから挨拶に赴こうとしていることを伝えます。すると驚くべき報告が帰って来ました。何と兄エサウもヤコブに会うためにこちらに向かって来ている。その彼には400人がともにいるという知らせでした。これはどういうことでしょうか。エサウはヤコブを迎え撃とうとして近づいて来ているのでしょうか。ヤコブは非常に恐れ、不安になって、宿営を二つに分けます。万が一、一つの宿営が打たれても、もう一つの宿営が生き残ることができるためです。

ヤコブは9節以降で主に祈ります。実はここはヤコブの祈りが記されている最初の箇所です。彼が祈ったという記録はここまでありませんでした。これまで長い時間をかけて少しずつ導かれて来た彼がここで初めて祈っています。またここに良い祈りの型を私たちは見ることができます。彼はまず9節で神の約束に訴えています。私の父アブラハムの神、私の父イサクの神が、私に「あなたの地、あなたの生まれた地に帰れ。わたしはあなたを幸せにする」と言われた、と。続く10節前半ではへりくだって祈っています。「私は、あなたがこのしもべに与えてくださった、すべての恵みとまこ

とを受けるに値しない者です。」そして神がくださった恵みを感謝しています。「私は一本の杖しか持たないで、このヨルダン川を渡りましたが、今は、二つの宿営を持つまでになりました。」その上で願いを述べます。「どうか、私の兄エサウの手から私を救い出してください。兄が来て、私を、また子どもたちとともにその母親たちまでも打ちはしないかと、私は恐れています。」そして最後にもう一度主の約束に訴えています。「あなたは、かつて言われました、『わたしは必ずあなたを幸せにし、あなたの子孫を、多くて数えきれない海の砂のようにする』と。」

このように祈って、その夜を過ごしてからヤコブは贈り物の準備をします。ある人は 13 節以降の贈り物の準備を人間的な知恵によるもので信仰と相容れないものと見ますが、そうではないと思います。ヤコブは前にエサウに大変な罪を犯し、ずるい仕方です。兄が受け取るべき祝福を横取りしました。その兄に会う際、このような贈り物を用意して悔い改めの気持ち、お詫びの気持ちを表すことは適切でしょう。何とかエサウに受け入れてもらうため、彼は策を練ります。群れをいくつかに分け、その間に距離を置くようにし、エサウが繰り返してそれらの贈り物に接し、そのことで彼の心がなだめられるように、自分の思いをより良く汲み取ってもらえるようにと図りました。こうして贈り物はヤコブより先に渡って行きましたが、彼自身はその夜、宿営にとどまっていたと 21 節にあります。

しかしヤコブはその夜、落ち着かかなかったようです。いよいよ明日エサウと会うだろうという前日、22 節に「その夜、彼は起き上がり」とあります。その日はそこにとどまるはずだったのに、彼は安心して休むことができず、やはり出発しよう！と立ち上がります。そして二人の妻と二人の女奴隷、11 人の子どもたちを連れ出し、ヤボクの渡し場を渡り、また自分の所有するものも渡らせました。そして彼が一人だけ後に残った時でした。これは彼一人になろうとして自分だけが後に残ったということなのか、それとも皆を送り出して自分がたまたま最後になったその瞬間のことだったのか、定かではありません。突然ある人がやって来て、ヤコブと格闘を始めたのです。ヤコブにとってこれはどういう出来事だったのでしょうか。彼としては大事な夜です。ただでさえ大変なプレッシャーの中にあります。明日エサウと会うことで頭の中は一杯です。恐怖で心は落ち着かない状態にあります。そんな中、こんな戦いに巻き込まれたくはなかった。なぜこんな時にこんな面倒なことが・・・と彼は思ったでしょう。それにしてもこの相手は誰だったのでしょ。夜でしたから良く見えません。「ある人

が」と24節に言われているように、ヤコブにとってそれは誰か良く分からないものの、「人」でした。しかし後の30節で彼が「私は顔と顔を合わせて神を見たのに」と言っているように、その方は神だと彼は知ることになります。あるいは後で引用する他の聖書の御言葉には「御使い」とも言われています。ですからそれは人間を超えた存在であり、御使いであったと言うこともできますし、究極的にそれは神ご自身であったと言うこともできるでしょう。果たしてこの取っ組み合いにどんな意味があったのでしょうか。この時、ヤコブはエサウとの再会を前にして非常な恐れを覚えていました。しかし一番の問題はそれではなく、もっと重要なのは神との関係であるということです。エサウとの関係を考えるよりもまず先に大切なのは神との関係です。その神との正しい関係にヤコブを立たせようとするためのものだったと考えられます。神との関係が正しく確立されるなら、その他の問題も乗り越えることができる。そのために神がヤコブのところに来てくださったのです。エサウと戦い、エサウと相撲を取る前に、まずご自身と相撲を取るようにと、その間に割って入って来られたのです。

もし相手が神だとすると、25節の「その人はヤコブに勝てないのを見てとって」とあるのはどういうことかと私たちは思います。しかしその人がヤコブのももの関節を打つと、それは外れました。タッチするだけでそれができたということはこの人が特別な力を持っていることを示します。ヤコブもこのことを通して相手がただの人ではないことをはっきり知ったと思われれます。ですから25節最初の「ヤコブに勝てない」というのは神がヤコブよりも力がないという意味ではあり得ません。人として現れたこの存在はヤコブとレスリングをして大切なことを教えようとしてしました。しかしただがっぷり四つに組んで戦うだけではヤコブがいつまでも踏ん張るだけで、彼が十分な学びを得るには至りません。そこでその人はヤコブのももの関節を打って外し、彼を弱い状態へと追いやりました。このことを通して大切なことを彼に教えようとしたのです。

その人は26節で「わたしを去らせよ。夜が明けるから」と言います。これは神を見て、なお人が生きることにはできないからでしょう。これに対してヤコブはどう答えたのでしょうか。先に見たように、この戦いは彼が望んだものではありませんでしたから、相手が去って行くというなら大歓迎。もっと早くそうして欲しかったと言ってもおかしくないところです。しかしヤコブは言いました。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」 ヤコブはこうして正しいところに祝福を求めるよう

に導かれたのです。彼のこれまでの人生は、自分の知恵と力で乗り切るといふ人生でした。しかし今やももの関節を外された彼はどうやってエサウとの再会に対処できるでしょうか。これではエサウが攻めて来た場合、戦うことができませんし、逃げることもできません。ヤコブはこの正体が良く分からない人と格闘する中で相手は神だと分かったのです。そこで彼はこの方に祝福を願ったのです。神にすべての望みを置いて、この方が自分を祝福してくださることを願い求めたのです。ホセア書 12 章 4 節にこの時のヤコブのことがこう言われています。「御使いと格闘して勝ったが、泣いてこれに願った。」つまりそこにあったのは相手を圧倒し、相手に何かを強いる強い人の姿ではありません。ヤコブは泣いて願ったのです。あなたによらなければ私には救いがありません。あなただけが私の望みですと。そうして正しい求めをするように彼は導かれたのです。

27 節でその人は「あなたの名は何というのか」と問い、ヤコブは「ヤコブです」と答えます。ヤコブという名は 27 章 36 節でエサウが語っていたように「押しのける」という意味です。人を押しのけて、自分の力で祝福をつかみ取るというのがこれまでのヤコブの生き方でした。しかしその人は「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ」と言います。「神と戦う」という意味の「イスラエル」という名は、この時のヤコブの経験を思い起こさせるものでしょう。ヤコブは神と格闘しました。神が来てくださってヤコブと直々に相撲を取ってくださいました。神はヤコブを簡単に打ち負かすことができますが、そうされませんでした。ヤコブが泣いて神に祝福を求めることを通して彼を強い者とし、「あなたは勝った！」と言ってくださいました。ですからこれは恵みの言葉です。神とがっぷり四つにくみ、神に祝福を願い求めることを通して、彼は勝利の祝福に生きる者とされたのです。そしてその結果として人にも勝つ者となりました。これはこの後のエサウとの関係にも当てはまりますし、以後のイスラエルのすべての歩みにも当てはまります。神により頼むことを通して「あなたは勝った」という祝福にヤコブも、また彼に続くイスラエルも生きることができるのです。

相手が離れて行った後、ヤコブはその場所をペヌエルと呼びました。それは「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」という意味でした。本来、神を見て生きていることはできないはずですが、ヤコブは直接的に神と会う経験をしたのに恵みによって守られました。エサウとこれから会うことは恐ろしいことですが、

それ以上に恐ろしい方と出会って守られたことは彼に大いなる励ましと確信を与えるものとなったでしょう。31 節に「彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に昇ったが、彼はそのものために足を引きずっていた」とあります。この「太陽は彼の上に昇った」という表現は時間の経過を示すとともに、ヤコブが導き入れられた新しい霊的状态を象徴するものでもあったのではないのでしょうか。以前、約束の地を離れる際、石を枕にして天使たちの幻を見たのは夜でした。またこの日も神と格闘したのは真夜中でした。しかし今や神と新しい関係に導かれたヤコブの上には太陽が昇っていました。その時の彼は足を引きずっていません。これだけを見るならエサウと会うのを前にして最悪の状況と言えます。しかし今や主により頼んでいる彼は大丈夫です。彼の上には太陽が昇っており、神の祝福と守りが彼の上にあります。このことにおいてエサウと会うための準備は完了となります。最後の 32 節にはこの時のヤコブの経験を記念してイスラエルはももの関節の上の腰の筋を食べないということが言われています。

以上の箇所から私たちは自分にどのように適用することができるのでしょうか。最後に短く三つのことを述べたいと思います。まず一つ目は私たちにもこの時のヤコブのような格闘の時があるかもしれません。突然思わぬ試練に投げ込まれること、望んでいない戦いを強いられること。暗闇の中で相手が誰か分からずひたすらもがくしかない状態となること。課題が色々あるのに、それに加えてなぜこんなことで苦しまなければならないのかというような状況に追い込まれること。しかしその時、私たちは思いたいのです。私と今相撲を取っている相手は他ならぬ神であるということを。神が私と組んで私と相撲を取ってくださる。神がすべてをセッティングして私と組み、私に大切なことを教えようとしてくださっている時なのだということです。

二つ目に私たちはそのただ中で神にこそ祝福を求めるように導かれるべきであるということです。私たちが頼るべきは神です。そこへと導くために神は他の道を閉ざされるのです。ご自身にこそより頼み、ご自身にこそ救いを求めるようにと。私たちがもがき苦しむそのただ中で、ヤコブのように神に祝福と恵みと導きと求めて祈りたいと思います。彼のように泣いて願って良いのです。そこに祝福があるのです。そこに「あなたは勝った！」と言ってくださる神の祝福が用意されているのです。

そして三つ目は私たちは今、弱い状態にあるかもしれません。ヤコブがこの時、足

を引きずっていたように、私たちも自分を見るなら弱いところだらけかもしれません。しかしヤコブはももの関節を外されて弱い状態になったからこそ、より良く神に恵みを求める者とされました。そしてそのことを通して祝福を受ける者となりました。ですから私たちの色々な弱い状態も、私たちが一層神に正しい祈りをささげるための助けとなることです。コリント人への手紙第二 12 章 9 節：「しかし主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである』と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」パウロは「私が弱いときにこそ、私は強い」と言うことができました。ですから私たちにどんな弱さがあったとしても、それはそれで良いのです。主がヤコブのももの関節を外されたように、私の弱さも主があえて私に与えてくださったものです。そんな状態にあっても、主により頼むなら恵みは十分なのです。「あなたは神と戦い、また人と戦って、勝ったのだ」という祝福に神は生かしてください。足を引きずっていたヤコブの上に太陽が昇っていたように、私たちも神により頼む者に神が与えてくださる本当の強さと十分な祝福に生きる者としていただくことができるのです。